



西垣文庫  
文庫 10  
7356  
1





特 文庫10  
7356  
1

西郷文庫

新聞

慶應四年閏四月十八日出板



新聞紙の世不行きより我邦内公私の  
事情都鄙此形勢或ハ海外諸國ハ奇事珍談あり  
ト朝夕坐らふして之を一掌の上に見聞する事  
トハかりぬ這ハ誠ニ時世開化の一端ふして自  
づと人乃耳目を新しき其智識を博むるりの  
やもハ士農工商共ニ今日支務此進退乗除  
益行るを甚と多うるへしきもを新聞ハ多く世  
ふあるを益く國の為と成るなりハ吾社中



こゝに又遠近の新況雜報を博く求め其確實  
なるを撰ひ、うゝて前日の新少帛をもちたるを  
と拾ひ集めて記録し、日々新聞と題つて普く  
世に布告せんとし、冀く四方の君子彼此を照  
し覽玉ひ、却て重淵の遺珠をも獲玉ふと仰る  
べし、且同志の人々若し新少を好むに幸に寄贈  
して此舉を助け玉ふべし、吾社トよく必勉て刊  
行を怠り、以て此題名小背り、さんをも希ふ此

博聞會社執事

日々新聞才一輯

閏四月三日末都末状の抜書

一 野州小山宿より外變く戦争有之、以て當表諸  
藩の内人、大坂より蒸氣船にて、今三日採出  
お成り、近日江戸へ著船し、事と存し  
一 尾張前大納言様の上末として、内宿割有之  
四月廿七日守山宿、廿八日茅津宿、廿九日京  
右の内日取よして、去廿七日守山宿、内宿途、不依  
二 内國元より、内途中江早打到来、付其俵並に  
引返して、お成り、其子細ハ、今津勢信州松本江



押寄せ同不落城致一松代至而危く續て美濃路より尾張路へ寄来り此越木曾山内境より四月廿三日名古屋表へ内進有之以此中予より右より来り出張内人教今三日迄に不残内引拂に成り尚又大坂表元千代様より近く内暇給り其外駿州遠州より大名様方より暇を乞はるる者も内帰國の由より

尾州より四月廿七日出内四月六日着江戸町人より又通に抜昏會津藩人教の由より凡六百程越後へ押

寄七日く人数お加り越後勢と戦争に及ひこれより信州飯山に領主本多相模守松内人教と一戦致し飯山城を采取り先手の勢已に松本領分迄押寄せ宿寄尾州領江向に暴行に程も難斗に付今日大番頭等外二番手三番手より信州内領分江向に内操出にお成り此右より前大納言様當四月廿五日御發途にて中仙道を内登来り此俄に守山宿より内引返り此相成り此越より  
○越後高田より江戸梅沢某 江當月十二日  
若来状此抜書



一 會津藩尾州へ發向し趣多く當高田表より先觸到若又官軍會津征伐として進軍の先觸同く到来し右之竹常所大混雜之少許

一 尾州藩西人教本曾洛中し進軍にお成り勢凡五千と申事之由座以

○豆州下田より未狀の写

一 去四月廿日友軍の軍組は蒸氣軍艦二艘當港内には碇泊し交朝五時半時過横は白く二本筋を引きし外國蒸氣船一艘港邊く乗寄せし折柄何故か不存右二艘の軍艦より俄に大炮打

出し外は松より砲發しし舟軍と相なり四時過りし雙方打合ひ砲發凡六十發余と覺えし霧の軍艦一艘上方に帆去り少く時過り残り一艘七回く帆去りお見え成し但し右の内一艘は遠州灘にて沈没しし風向を多しし一と志し相分り不申し當実事承りし追く可し右戦争中いづもの船より打ちし此のう當町内は一丸飛来り市中大に驚きし然り怪我人を無り也

○雜報



板倉松叟ハ三月十三日主従七十人程より日光  
 山江著し南照院ニ蟄居せしが四月八日官軍今  
 市駅ニ進み来りけしハ後者の中ニハ難を避て  
 会津ニ遁去らんとすむろもの多しされども  
 松叟更ニ関入せり終ニ出て伏罪り依之て主従  
 八人今市より宇都宮ニ送くらも城下の寺院ニ  
 預けらる其餘の後者ハ壬生ハ預けられし此  
 途中松叟父子ハ手を曳て歩行し宇都宮の兵士  
 槍を搦て左右を警固す足る人之を憐みし時  
 涙を流せしとぞ然るに四月十九日宇都宮落城

の後右寺院火難を免もたると付脱走兵茲ニ尋  
 ね来り守護の番兵を斬り松叟を奪ひ出して再  
 ひ日光江逃去りし

足尾十八ヶ村の内水沼村といふ處ニ星野七郎  
 右衛門といへる豪家あり先頃上野ニ百姓一揆  
 起りし時農兵を指揮し十八ヶ村を去りし治  
 老々々人々も常々慈善の志添く水損早魁の折  
 ハ能く村々の貧民を救へり此頃新田万次郎近  
 郷を鎮撫して水沼村より来り此家ニ休息志し  
 時其家臣黒田新一郎といふもの七郎右衛門より



況きす、先、新田侯兵を擧て徳川氏を征伐せむ  
乃志あるが故に其身も農兵を率ひて隨小べし  
といへり、きんども七郎右衛門ハ之を断ちり、利  
さへ此十八ヶ村ハ餘人の鎮撫を交けり、旨を  
演べたりと云ふ  
同月十二日仙臺藩より廻船方持の蒸気船大江  
腰の人教押寄を戦争に及ひり、或瀨勢敗軍  
して遂に城を衆取らんとし、とり小其事柄ハい  
し、洋ありと云ふ

丸を借受け品川より人教を乗せし、関元へ出帆  
志しり、は運賃五百両あり、但し石炭の代料ハ別  
にありと云ふ  
大惣督府より勝安房守江総房辺の脱走人鎮撫  
いしり、可き命せらるる、たゞし付回人より、榎本和  
泉守へ中傳へ、依之、當月十四日朝、開陽艦ハ品川  
沖を出帆せり

○ 伏啓 新聞を成丈早く報ずるを專一として得  
たるよし、直之を昏加るあはれ、前後入り違



ひたひた條下少をうり看官粗漏を咎れ玉ふ  
り也

才二輯三輯日あつて出版以し

會社執事



